野山の花 — 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部　白瀧 義明（*SHIRATAKI Yoshiaki*）

カラスビシャク *Pinellia ternata* (Thunb.) Breitenb.（サトイモ科 Araceae）

梅雨の晴れ間，山裾のあぜ道を歩いていると，地面から緑色をした槍のようなものを突き出している奇妙な植物を見かけます。この植物は，突起物をカラスの柄杓にたとえ「カラスビシャク」と言います。

カラスビシャクは日本，朝鮮，中国で普通に見かける多年草で，田畑の雑草になりやすく，塊茎は，少数のひげ根をつけ，葉は数枚，塊茎から直接出ています。葉柄は長く直立し，長さ 10 ～ 20cm で，下部の途中に 1 個の球芽（むかご）をつけています。葉身は 3 全裂した掌状複葉で，小葉はだ円形ないし線状皮針形。先は鋭尖形，基部は鈍形。全縁で小柄はほとんどありません。葉の分岐点にむかごができることもあり，5 ～ 7 月ごろ，約 30cm の緑色の花茎を出し，その先に仏炎包に包まれた肉穂花序をつけます。仏炎包は緑色または帯紫色で，下半分は巻いて筒状になり，肉穂花序は下部の仏炎包と合着したところに雌花をつけ，その上に雄花を密生しています。花序の先は長くのび，鞭状となり，仏炎包の先から上につき出ています。地面から突き出た槍のように見えたものは，花を内蔵した仏炎包だったのです。本植物は，昔，中国から帰化した史前帰化植物と考えられ，生存力が非常に強く，塊茎，種子，むかごのいずれからも繁殖が可能であることから，厄介な畑の雑草として知られ，「百姓泣かせ」の名や，スズメノヒシャク，キツネノヒシャクなどの名もあります。塊茎の外皮を除いて乾燥したものをハンゲ（半夏，Pinelliae Tuber）とよび，漢方で鎮嘔鎮吐薬，鎮咳去痰薬とし，つわり，胃部停水，悪心嘔吐，心痛，咳嗽，腹中雷鳴，咽痛などに半夏瀉心湯，六君子湯，小柴胡湯，小青竜湯，柴朴湯，柴苓湯，麦門冬湯などの多くの漢方処方に使用されています。成分としては，フェノール化合物の homogentisic acid とその配糖体，3,4-dihydroxybenzaldehyde とその配糖体である 3,4-diglycosylic benzaldehyde のほか，セレブロシド類の 2′-*O*-acetyl soya-cerebroside Ⅰおよび，デンプン，脂肪酸，糖，アミノ酸，ステロール類，シュウ酸カルシウムなどが知られています。生のカラスビシャクの塊茎や未加工のハンゲを口にすると強烈な舌やのどの痛みに苦しむことになります。この強烈なえぐ味の原因物質は 3,4-diglycosylic benzaldehyde とされていますが，シュウ酸カルシウムの針晶も原因の一つと考えられます。生薬名は，夏の半ばに花が咲くとした漢名の半夏からで，属名の *Pinellia* は人名に由来し，種小名の *ternata* は三数の，という意味です。

季節を表す七十二候のひとつの半夏生（はんげしょう）は，半夏（カラスビシャク）が生える（＝花が咲く）時期としてつけられたとされ，毎年 7 月 2 日頃にあたりますが，ドクダミ科のハンゲショウ *Saururus chinensis* の葉が半分白くなって半化粧する頃という説もあります。また，カラスビシャクの別名には「ヘソクリ」の名があり，これは，農家のお年寄りや主婦が塊茎を少しずつ取り貯めて，生薬業者に売り，小遣いを得たことからとか生薬にある凹みが，へそに似ているからとする説もあります。

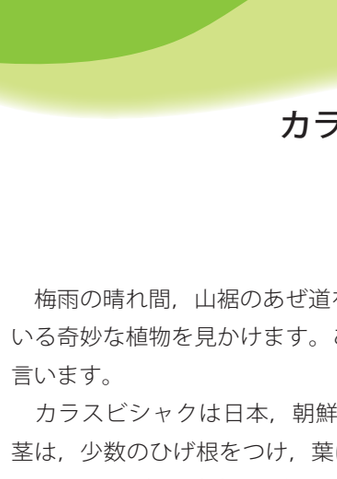


写真１　カラスビシャク（地上部）

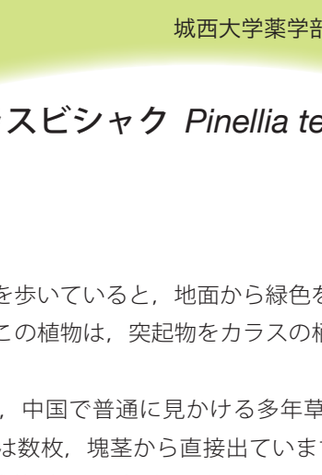
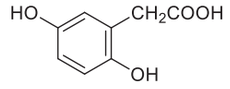


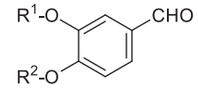
写真２　カラスビシャク（全形）

写真３　カラスビシャク（花）

写真４　生薬：ハンゲ（半夏）

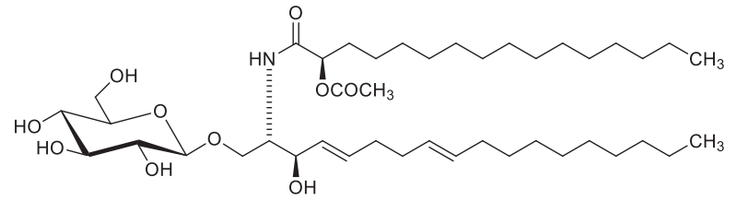


homogentisic acid



3,4-dihydroxybenzaldehyde : R^1, R^2=H

3,4-diglycosylic benzaldehyde : R^1, R^2=Glucose



2'-*O*-acetyl soya-cerebroside Ⅰ

図１　成分の構造式